

オランダ発:母豚グループ管理の泣き所

オランダは 2013 年から母豚のグループ管理が義務付けられるそうです。裏を返せば妊娠中(50 日以降)のストール管理は全面禁止という法的規制です。何とか妊娠鑑定が終わってしばらくはストール管理が継続できそうですが、その後は豚が痛んだり、思いがけないトラブルが起きないか、世界中が注目しています。日本でも先駆けて導入された方がいらっしやると聞いていますが、どうでしょうか。

実際の生産者の心配をよそにEUの先を突っ走っているオランダにとっては、こうした学会で研究者が実態を報告することしか窮状を訴えるすべがないのかもしれないかもしれません。

報告は母豚数が 280 頭から 450 頭に増加した農場の症例報告です。グループ管理に移行して年間母豚当り離乳子豚数が 29 頭から 26.4 頭に減少してしまった原因を究明しようとしたものです。

妊娠が確定した 50 日以降の母豚がいよいよ 4 台の自動給餌器がついたグループ妊娠舎に収容されました。一群 192 頭です。母豚は PRRS、大腸菌、丹毒、インフルエンザ、パルボといったワクチンを定期で接種していますが、妙な流産が続発したのです。流産した母豚は特に顕著な症状を示すこともなく、臨床的には至って健康です。産歴にも関係なく異常な興奮も示すこともありませんでした。どうも喧嘩ではなさそうです。さまざまな抗体検査を実施して疾病がらみを絞り込みましたが、どうやら疾病が原因ではなさそうです。このままでは何の手掛かりもありません。しかし、流産胎子は同じ発育日令で一様に発生していることから、同時期に何かが起こった可能性が



示唆されます。そこで給餌データを詳しく日々チェックしてみると、なんと自動給餌器の無作為な故障が時々見られ、それに伴って餌を食べていないことが判明しました。自動給餌器まで何度通っても器械が壊れているので食べられない豚もいたようです。

何事もなく一見のどかな母豚群ですが・・・

一般に妊娠初期に給餌量が極端に少ないと流産のリスクが高まりますが、この農場の場合には妊娠中期から後期にかけてです。自動給餌システムは個別給餌ができるので

一般にストレスがなく、群管理には適していると考えられていましたが、器械が適正に作動していなければ何の意味もありません。栄養不足で妊娠の維持すらできなくなってしまった模様です。これが原因で同時期の流産を頻発したと結論付けられました。研究者らは、こうしたグループ管理を安定的に行うには、日々の給餌量をこまめにモニター出来るシステムも同時に導入し、獣医師としても別の観点からのチェックが必要になると警告しています。

(B.Kolpa et.al, IPVS 2010 より)

2010 年 9 月 グローバルピッグファーム(株)